

投稿
私の中国紀行

ここ大田区は中国北京市朝陽区と友好都市関係を結び、毎年青少年相互訪問し、交流を深めていることは誠に有意義だと思います。

ところで、私が貿易商社員の現役時代には中国との輸出輸入業務が中心でした。そして、一九八九年(平成元年)五月、業務で北京出張、朝陽区のホテル滞在中、六月四日の天安門事件につながる大規模な反政府デモに遭遇することになった。

五月初め頃から北京大学生を中心とする人々の政府に対する民主化要求が高まり、一般民衆の共感も得て、大きな盛り上がりを見せていた。また、有名な天安門広場では北京大学生のリーダー達がそここでハンストの実力行使に入り、それに同調する学生同志や民衆の輪が取り巻き、大旗を掲げたり、大歓声をあげたりして盛大な支援をしていた。北京の主要な大通りは、大変な人出で旗を振って大歓声をあげていた。各職場の従業員が隊列を組んだデモ隊は延々と数え切れないほど連なり、また、高校生、中学生、小学生の隊列までも連なっている。

また、トラックの荷台いっぱい立ち並び旗を振り、氣勢をあげるものも連なる。

そのうちのある夜、たまたま深夜にホテルの窓からカーテン越しに垣間見たものは・・・夥しい軍隊の列。ホテル前の、天安門広場に連なる大通りを縦列隊列で右から左、延々と先が見えないほど、途切れることなくただ黙々と進んでいく。まさに戦慄を覚えずにいられなかつた。

数日後、北京の空港以下、市街の要所所には軍隊の配備が行われるほか、戒厳令が発令されるのではないかの噂まで出てきた。その為予定を切り上げて、北京空港閉鎖の前に急遽帰国した。その後、当社北京支店駐在の日本人社員十数名は危険回避のため、一時帰国せざるを得なかった。

そして民主化要求が最高潮に達した六月四日、遂に中国政府は人民解放軍の武力行使による最悪の事態に至った。

今振り返ってみれば、まさに革命前夜ともいえる様な天安門事件の前段階に立ち会えたこととなり、思い出す度に高揚感を覚えずにはいられない。

宮腰義昭(多摩川)

投稿
内蒙古脱出に寄せて

「かまにし17」第四十二号に掲載された、永妻悦子さんの投稿文「内蒙古脱出」を読んで、寄稿させていただきます。

戦争について語る方が少なくなってきた昨今、思いがけずも地域情報紙で知る機会を得るとは、嬉しい驚きでした。

私は昭和五十年生まれですから、戦争というものを知りません。ご高齢となられた多くの方々が、未だに戦争の傷跡を隠しながら戦後の生活を送り、生きて戦争を終えられたことを運がよかったと謙虚に受け止めていることが、私にとってはたくましくもあり、またどこか悲しくもあります。

何か、戦後生まれの私に、できることはあるでしょうか。できるだけ多く、体験者のお話を伺いたいと常日ごろ思っています。「かまにし17」を通じて、戦争を体験された方々の思いを感じ取れたらいいなあと思います。

私たちの住む町には、赤ちゃんからお年寄りまで、幅広い世代の方々が住んでおられます。みんなが幸せ

に生活していく上で、世代間交流はとても大切だと思います。昭和五十年生まれの私は、ご高齢世代の思いを受け継ぎ、子どもたちに伝えていく「橋渡し」であると思っています。

渡辺由香子(西蒲田)

編集後記

この冬は、ずいぶん寒い日が続きました。こんなときは、銭湯でゆっくりと暖まるのもいいものですね。

今回の特集の蒲田西地区の銭湯今昔を作成するにあたり、はすぬま温泉の近藤様、秀の湯の川島様にご協力をいただきました。ありがとうございました。

蒲田西特別出張所管内

| | | |
|----|----------|---------|
| 人口 | 男 | 30,143人 |
| | 女 | 27,458人 |
| | 計 | 57,601人 |
| 世帯 | 31,546世帯 | |

平成24年2月1日現在

情報紙に対するご意見やご感想、投稿などを、事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七十一-二一七
(三七三二)四七八五

平成24年3月1日発行

かまにし

発行 地域力推進蒲田西地区委員会
編集 地域情報紙編集委員会

第43号

わがまちの顔

元気ハツラツ!

北村 正子さん

東矢口二丁目にお住まいの北村正子さんは、九十七歳の現在も週に三日ゴルフ場で、プレーしているらしいです。北村さんに、元気の秘訣とゴルフの魅力をお聞きしました。

北村さんは、大正三年、長野県埴科郡に生まれ、和洋専門学校を卒業後、女学校で家庭科の先生をしていました。結婚をして、昭和二十三年から現在地に住んでいます。

五十歳の時、ご主人の影響を受けて、ご自身もゴルフを始めました。当時、高島屋の「ローズサークル」というゴルフのサークルがあり、そこで習ったり、自宅の庭に、ゴルフネットを張って練習をしていました。西熱海のゴルフ場での大会で優勝してから益々、熱が入りました。

昭和四十四年には、筑波カントリークラブの会員になっています。十二年前にご主人が亡くなられるまで、二人でゴルフを楽しんでおられ、「うらやましいで賞」を受賞されています。

ゴルフ場に行く時は、朝五時に

家を出て、一ラウンド・十八ホールで、二万四千歩位、歩いていきます。スコアはハーフを五十六から六十で回る腕前です。

昨年四月には、隣のコースで、樋口久子プロがプレーをしていて、北村さんの年齢にびっくりされ、「ぜひ、あやかりたい」と言ってくれて、ボールをくださったそうです。

シニアレディースや他の会の方から「一緒にプレーをしたい」という誘いが多くなり、「以前より忙しくなりました」とおっしゃる北村さんの笑顔が素敵でした。

二十年前から、庭のミカンを収穫して、オレンジピールを作っています。ミカンの皮を千切りにして、三回程アクを抜き、砂糖で煮て、グラニュー糖をまぶして完成ですが、一回にミカン七個位で四時間かかります。多い時は、ミカン四百五十個分のオレンジピールを作り、百人くらいの方に差し上げたそうです。毎年、心待ちにしている方もいるようです。

四十代の頃、町会の手伝いをしていたことがあり、今も朝、自宅周辺や隣の公園の清掃など地域に

貢献しています。

お元気な北村さんを見て、筑波大学スポーツ医学部の田中教授が、「北村さんが百歳になったら、日本体育協会のスポーツグランプリ優秀賞に推薦したい」という手紙をいただいております。毎年誕生日には、花のプレゼントが届いています。

今年六月には、女学校の同窓会会長さんから招待状をいただいております。長野に行くのを楽しみにしていらつしやいます。

「規則正しい生活と好奇心を持つこと」とおっしゃる北村さん。いつまでもお元気で、ゴルフを楽しんでください。

(取材 高橋委員)



銭湯今昔物語

銭湯の歴史

風呂の語源は定かではないが、風呂はもともと蒸気風呂、即ちサウナであった。これに浴槽が付け加わって日本独自の風呂になっていったのである。

日本における銭湯の始まりは寺院といわれている。僧侶たちが身を清めるために「浴室」が設置された。病を退けて福を招来するものとして入浴が奨励され、貧しい人たちが病人、囚人たちを対象としての施浴も積極的に行うようになった。鎌倉時代になると一般の人たちにも無料開放する寺社が現れて、荘園時代が崩壊すると入浴料を取るようになった、これが銭湯の始まりといわれている。

室町時代には、京都の街中で入浴を営業する銭湯が増えていった。このころ、庶民が使用する銭湯は蒸し風呂タイプの入浴法が主流であった。上流階層であった公家や武家の邸宅には入浴施設が取り入れられるようになっていたが、公家の中には庶民が使う銭湯を、時間限定で貸し切る「留風呂」と呼ばれる形で利用した者もいた。

銭湯は江戸時代から昭和にかけて大きく発展した。

江戸における最初の銭湯は一五九一年(天正十九年)江戸城内の銭瓶橋(今の江戸橋付近)の近くに伊勢与一が開業した蒸気浴によるものであった。その後、浴室の中に小さな湯船があって、膝より下を湯船に浸し、上半身は蒸気を浴びる為の戸で閉め切るといふ、湯浴と蒸気浴の中間のような入浴法で入る戸棚風呂が登場した。さらにその後、湯船の手前にざくろ、口という入口が設けられた風呂が登場し、中は湯気がもうもうと立ちこめ、暗く、湯の清濁さえ分からぬようになって入浴するようになった。後に客が一度使った湯を再び浴槽に入れる構造になった。こうしてだんだん蒸気風呂から湯に浸かる湯浴みスタイルへ変化していった。

その頃は、老若男女が混浴であった。浴衣のような湯浴み着を着て入浴していたとも言われている。一七九一年(寛政三年)に「男女入込禁止令」や後の天保の改革によって混浴が禁止されたが、必ずしも守られなかった。営業時間は朝から宵のう

ち(現在の午後八時頃)まで開いていた。銭湯は庶民の娯楽、社交の場として機能しており、落語などが行われたこともあった。特に男湯の二階には座敷が設けられ、休憩所として使われた。当時の銭湯の入口には矢をつがえた弓、もしくはそれを模した看板が掲げられることがあった。これは「弓射る」と「湯入る」をかけた洒落の一種である。

当時は内風呂を持てるのは大身の武家屋敷に限られ、火事の多かった江戸の防災の点から内風呂は基本的に禁止されていた。江戸時代末期には大店の商家でも内風呂を持つようになった。

銭湯で客に湯茶のサービスをするようになって湯女が大活躍する。湯女たちは、昼は客の背中を流すが、夕方四時を境に、客をもてなす。そのため、湯女風呂は商家の旦那衆や若者たちの間で評判となった。しかし、一七〇三年(元禄一六年)江戸を襲った震災が引き金となって、湯女風呂は自然消滅した。

一八七七年(明治十年)頃、ざくろ口を取り払って、天井が高く湯気抜きの窓を設けた広く開放的な「改良風呂」と呼ばれる風呂が評判となり、現代的な風呂の構造が確立した。一八七九年(明治十二年)、混浴は禁止となった。昭和時代になると水道式の蛇口

が取り付けられるようになった。関東大震災後、東京では宮型造りの銭湯が使われ始めた。

戦後、都市人口が増大すると共に、至る所に銭湯が建設された。しかし、自家風呂が普及すると共に銭湯は急速に減少していった。

大田区の銭湯

大田区では、昭和五十二年に百七十一軒あった銭湯が、平成一九年には七十四軒にまで減ってしまった。現在残っている銭湯も、黒湯やサウナ等、特徴を出しながら運営している。

現在営業している銭湯の一軒を紹介する。

荏原高校通り商店街にある草津湯は、電気風呂や二十人ほど入れるサウナ、ジャグジー風呂、寝風呂、水風呂、黒湯など七種類の湯船があり、大勢の人たちが入浴を楽しんでいる。人によっては一時間くらい入っていることもあるそうだ。ロビーには大きなテレビが備えてあり、風呂上りの人たちがビール片手にゆっくりくつろいでいる。

昔ながらの銭湯が減る一方で、最近ではスーパー銭湯といわれる新しい形態の銭湯が人気を集めている。一般の銭湯よりも高い料金を支払って、温泉やサービスを楽しむ人たちが増えているようである。

かつて西蒲田一丁目にあった日蓮湯の様子を、國廣編集委員の思い出と共に紹介する。

「昭和十七年春、私は岐阜より現在の西蒲田一丁目に転居しました。家は、日蓮湯の主の田中さんの敷地内にありました。広い庭には旅館のような二階建ての家があり、一階に五室、二階にも五室、部屋の手前には広い炊事場があり、何日も滞在できる湯治場になっていました。」

その日蓮湯には井戸から汲み取る二十五度くらいの黒い水があり、その成分は胃腸病、腰痛、足痛などに効くと、広く地方からも上京して入浴していたと聞いております。現在も大田区の多くの浴場に黒湯があり、体が温まる湯として有名ですが、私も冬にはよく浸かった経験があります。

私の家から日蓮湯の間には、桜、梅、柳と、緑の多い庭と池があり、鯉も泳ぎ回っていました。その為か私の家にも青大将の姿が見えることもありました。

健康の浴場として栄え、昭和二十年四月の空襲により焼失し、三年後には女塚湯として再建しましたが、平成十九年に廃業しました。」

「風呂のはなし」大場修著
「風呂と湯の話」武田勝蔵著
(取材 山崎、國廣、石渡委員)

蒲田西地区の銭湯今昔

| | | | |
|--------|-------------------|--------|---------------------|
| 西蒲田一丁目 | ①辰巳湯 ②女塚浴場(廃業) | 新蒲田二丁目 | ⑩おしどり湯(廃業) ⑪山楽泉(廃業) |
| 西蒲田二丁目 | ③池上温泉 | | ⑫あいらく泉(廃業) |
| 西蒲田三丁目 | ④鶴の湯(廃業) | 新蒲田三丁目 | ⑬秀の湯 |
| 西蒲田四丁目 | ⑤朝日湯(廃業) | 東矢口二丁目 | ⑭草津湯 ⑮堀川湯(廃業) |
| 西蒲田五丁目 | ⑥改正湯 ⑦千代の湯(廃業) | 東矢口三丁目 | ⑯弁天湯(廃業) ⑰第二幸の湯(廃業) |
| | ⑧立正湯(廃業) | 多摩川一丁目 | ⑱大黒湯(廃業) |
| 西蒲田六丁目 | ⑨大田黒湯温泉 ⑩はすぬま温泉 | 多摩川二丁目 | ⑲福の湯(廃業) |
| 西蒲田七丁目 | ⑪月の湯(廃業) ⑫御園湯(廃業) | | |
| | ⑬第二弁天湯(廃業) | | |
| 西蒲田八丁目 | ⑭君の湯(廃業) ⑮太陽泉(廃業) | | |

※ここに掲載した以外にも、銭湯があったかもしれません。編集委員がわかる範囲で作成したものですので、ご了承ください。

